

Title	William Lamont (ed.), The Tudors and Stuarts
Sub Title	
Author	清水, 祐司(Shimizu, Yuji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1981
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.1/2 (1981. 6) ,p.226- 226
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0226">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19810600-0226</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

William Lamont (ed.), *The Tudors and Stuarts*, Sussex Books (London), 1976. 216 pp.

ここ数十年間におけるイギリス史研究の進展には目覚ましいものがある。あまたの実証研究により、かつての壮大な思弁や単純な仮説に基づく歴史の構図はもはや遠い過去のものになってしまった。十六・十七世紀研究も、例外ではない。しかしその反面、研究者が新たな総合に到達することはもとより、いわゆる「中範囲の理論」を組立て、あるいは隣接の時代・テーマを把握することすらも次第に困難になりつつある。

こうした現状を踏まえて、一流の研究者による対談形式によって十六・十七世紀イギリス史の重要なテーマについて高い水準での紹介を行ない、研究者と研究者、あるいは研究者と学生・一般読者の橋渡しを試みたのが William Lamont (ed.), *The Tudors and Stuarts* である。

目次を示すと、1. Henry VII (S. B. Chrimes & R. L. Storey); 2. Henry VIII and Thomas Cromwell (G. R. Elton & J. J. Scarisbrick); 3. The Rise of the Gentry (M. Hawkins & M. Kitch); 4. Elizabethan England (J. Hurstfield & A. G. R. Smith); 5. Mary, Queen of Scots and James VI (G. Donaldson & A. Fraser); 6. James I in England (R. Ashton & W. Lamont); 7. Charles I (G. Aylmer & W. Lamont); 8. Parliamentarianism, 1604-1642 (G. Aylmer & C. Russell); 9. Puritanism, 1559-1642 (G. Aylmer & W. Lamont); 10. Oliver Cromwell (Ch. Hill & D. Pennington); 11. Science and Society in the Seventeenth Century (Ch. Hill & D. Pennington); 12. The Restoration (G. Aylmer & J. R. Jones) となっており、テーマによっては以前の「論争」の継続にもなっているものがある。一例を挙げると、エルトンとスカリスブリックの対談がそうである。周知のように、エルトンは *Tudor Revolution in Government*, 1953 によってヘンリー八世時代におけるトマス・クロムウェルの役割を高く評価し、従来のヘンリー八世像を覆した人物である。他方、スカリスブリックは *Henry VIII*, 1968 でエルトンのヘンリー八世及びクロムウェル像に修正を試みた人物である。しかも、スカリスブリックの著書が公刊された翌年、エルトンはこのスカリスブリックの見解に対して厳しい書評を *Historical Journal*, XII, 1969 に寄せた。ヘンリー八世及びトマス・クロムウェルをめぐって以上のような経緯を経てきている二人が改めてそれぞれの見解を披瀝するのであるから、学生・一般読者はこのテーマについての最近の知識を獲得でき、研究者はその後の二人の考え方を知ることができるのである。

最初に述べたように、専門化が進み、自分のテーマ以外の領域の理解が容易ではなくなりつつある今日、本書は極めて有益と思われるので余白を借りて紹介した次第である。なお、本書の姉妹編として十六・十七世紀のヨーロッパ史の重要テーマについての対談集 Peter Wells (ed.), *European History, 1500-1700* もあることを付記しておく。